

平和をたずねて

広岩 近広

京都が最初にB29の空襲を受けたのは1945（昭和20）年1月16日だった。西陣空襲の半年前である。

凍えつく深夜、B29が単機で東山の上空に現れた。空襲警報も鳴らず、清水寺と八坂神社に近い一帯は寝静まっていた。

当時、国民学校1年の7歳だった福田輝彦さんは、東京・浅草から母親の実家がある京都市東山区馬町に引っ越していた。

父親がフリーピン戦線に出征したため、母親は1歳に満たない弟と福田さん連れて、前年の11月から実家に身を寄せた。母親は32歳だった。

現在、千葉県船橋市に住む、71歳の福田さんは言った。「私にとって東山空襲は、まさに昨日の出来事です。昔話にはなりません。だから怒りと恐怖が、今も消えないのです」

私は話を聞くうちに、福田さんの言われる意味がよく理解できた。こういうことである。

底冷えの厳しい夜だった。頭から布団を2枚かぶって熟睡していたところをスドンという強い音と衝撃に襲われた。眠りを破られたときは、息苦しくて身動きができなかった。「家の2階が崩れ落ちて壁土をかぶっていたのです。やっとのことで自力脱出できたとき、助けてえ、と叫ぶ祖母の声が聞こえてきました」

目を凝らした先で、地面から片手が出ていた。実際は崩れ落ちたがれきの下に、祖母が埋まっていたのである。福田さんは地震に

見舞われたと疑わなかった。警防団員が血だらけの祖母を救出してくれた。祖母は自分のことより、一緒に夜なべで裁縫をしていた娘、つまり福田さんの母親はどこにいいのかと案じた。

母親は玄関口に吹き飛ばされておおむけに倒れていた。顔に傷がなく、失神しているように見えた。「ねえちゃん、目をさましい」。26歳の叔母が叫んだ。

抱きかかえると、後頭部がザクロのように割れていた。即死とみられた。鈍器でえぐられたような傷跡だった。

福田さんは気丈な祖母から指示された。「タオルか布きれを早く持っておいで」。タオルを探して祖母に渡すと、母親の頭の下に流れ落ちていた大脳や小脳を納めた。「お墓に埋めるんやで」と祖母は言った。

若い母親の命を奪った犯人は地震ではなく、B29が投下した爆弾だった。それは柱をらせん状にえぐり抜き、硬い素材のタンクスにミスがはったような跡を刻みつけていた。

幼い弟は、倒れた蓄音機の間挟まれて奇跡的に助かった。29歳の叔母は弾丸が右手の手のひらを貫通し、26歳の叔母は左ほおを削られていた。4人弟妹の長女の悲痛な死を前に、2人の妹は翌朝になって自身の傷に気づくほどだった。

福田さんは振り返る。遺体安置所で母親を引き取った叔母は、顔や手足のない人や足の裏から頭のとっぺんまで弾丸のはしった人も見たそうです。

無念でなりません。

7歳の子どもにうつつけられた怒りと恐怖が消えることはない。

（次回は15日に

消えない怒りと恐怖 ③ 京都空襲 古都が震えた日



「昔話にはなりません」と東山空襲について話す福田さん

掲載